

聞名仁教

第 181 号 毎月発行
(発行日) 2025 年 10 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutsuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

失敗のない生活

佐々木蓮磨

昔、アメリカにエジソンと

いう有名な発明家がおられました。この人はいろいろと人類に有益な発明をして、不朽の名を残した方がおられます。ところがある発明をするときに、数十回の失敗を重ねられたそうです。

そこである人が、エジソンに向かって「あなたは、このたびの発明については、随分失敗を重ねましたね!」と言ったところ、エジソンが答えて言うには「私は一度も失敗した覚えはありません」と。そこで、いまの人はまた重ねて「しかし、実際において幾度も仕損^{しそこな}つたではありませんか」と反問すると、エジソンが言われるには「あれは失敗ではありません。私の貴重な研究でありました」と。なんとという痛快な返答でしょうか。

こんな人には、一生失敗と
いうことはないでしょう。い

かなる当てはずれに出会っても、また失敗しても、それを善意に解釈して、プラスにして行つたならば、決して失敗ということにはならないのです。一般に失敗とか成功とかいうことを客観的に見るものですから、人間はつねに不幸に陥るのです。純粋な客観というものは、あり得ないので

す。いかに客観といつても主観をはなれては存在しません。むしろ、客観的価値というものは、主観によって作られると見るべきでしょう。

そこで清沢満之師は「外物は精神の模様により転変する」とも「貧を貧と思わざれば富なり、富を富と思わざれば貧なり」とも、あるいはまた「如来を信ずる者に失敗なし」と言っておられるが、いかにも、その通りであると思います。親鸞聖人は遠く越後に流罪の身となられたのでありましたが、「われもし配所^{おきむ}に赴^{おもむ}かずんば、何をもつてか辺鄙^{へんぴ}の群^{ぐん}

類^{るい}を化せん。これなお師教^{しきょう}の恩致^{おんち}なり」と言つて、むしろ災難を感謝で受け取っておられます。

こうなると、流罪に出会うたことも、ご本人にとつては決して不幸ではないのであります。このように心の見方、受け取り方で、世界がいかにうにも変わるといふ真理を理解しておらないと、人間というものは決して幸福な生活を営むことはできないと思ひます。

エジソンという人は、もちろん異常な天才ではあったで

しょうが、失敗というものを、善意に解釈し、自分の研究の良き材料として生かして行かれた優れた精神力が、エ

ジソンをして、発明王といわれるほどの偉大な仕事を成し遂げ、人類福祉の面で大きな貢献をもたらされた一つの原因であると思います。

現代は機械文明といわれるほどに機械力が発達して、人間の方が機械から使われる状態になってきたことは、現代の悲劇といわねばなりません。今こそ世界人類は、精神の優位を取り戻して、人間を物質や機械の奴隷から、救うべきであると思ひます。

(『信心清話』一九六五年刊より)

了

《念佛寺報恩講》

十二月二十二日(月) 午後二時始

講師 滋賀県

瓜生崇先生

*なお同日十二月二十二日は午前十時より勤行・法話(念佛寺住職)があります。どなたでも自由にお参りくだ

清沢満之先生に学ぶ

⑦

清沢満之先生いわく
「請う勿れ、求むる勿れ、爾何の不足がある。もし不足ありと思わば、是れ爾の不信にあらずや。」

如来は爾がために必要なものを賦与したるにあらずや。若し其賦与において不十分なるも、爾は決して此以外に満足を得ること能わざるにあらずや。

蓋し、爾自ら不足ありと書いて苦悩せば、爾はいよいよ修養を進めて、如来の大道に安んずべきことを学ばざるべからず。之を人に請い之を他に求むるが如きは、卑なり、陋なり。如来の大道を侮辱するものなり。如来は侮辱を受けることなきも、爾の苦悩を奈何せん。」

現代語訳（他人にものを乞うな、求めるな。君に何の不足があるか。もし不足があると感じると思うなら、それは君の不信ではないの

か。如来は君のために必要なものを君に与えたのではないか。たとえ如来の与えるものが不十分であつても、君はこれ以外に満足を得ることができないのではないだろうか。おもえば、君自身に不足があると思つて苦悩するなら、君はいよいよ修養を深めて如来の大道に安んずることを学ばなくてはならない。不足をうめるために他人にたよつたり求めたりするのは卑劣であり、陋劣である。如来の大道を侮辱するものである。如来はそんな侮辱でびくともしないが、そんなことで君はどうかなるのであろうか）

（今村仁司現代語訳『清沢満之語録』、岩波書店、二〇〇一年）

この清沢先生の文章は「絶対他力の大道」（『清沢満之先生の言葉』、永田文昌堂、二〇二三年再刊）の中の一文ですが、元は『臘扇記』という先生の日記（明治三一〜三二年）

の中の文章です。表現が堅くて読みにくいので現代語訳を添えました。

この文は私が十八歳の時から読んでいますが、その当時は修養書のように読んでいました。人生に不足があつてその不足を解消したいと、他者や国家などに、外に求めるのではなく、自分の中に満足を求めなくてはいけない。本当に必要なものはアミダ如来様がすでに与えてくださっているのであり、それを見出して感謝することが大事だと、そのように了解していました。

これはあながち間違いではないのですが、如来様がすでに与えてくださっているものとは何か。またそれをどこに見い出すのかということが分かつていませんでした。そこで今回はこの文章に沿つて、清沢先生が何をいおうとしておられるのかを学びたいと思います。

まず
「請う勿れ、求むる勿れ、爾何の不足がある。もし不足ありと思わば、是れ爾の不信にあらずや。」

ということですが、私たちはあれが足りぬこれが足りぬと、物足りようとし、「得よう」「得よう」と内に外に求めていますが、一向に満足できなく、不足不満になりがちです。それは如来様がすでに与えてくださつていて、一番大事なものに対して、それが分からず、如来様が与えてくださつていて、以外のところに真の満足を求めていきます。「そこにはないよ」と教えてくださる善知識からのお説教などで如来様のおはたらきを聞いてもそれを信じない、いわば不信に陥つて素直に受け取らないからであるといわれるのでありましょう。

次に

「如来は爾がために必要なものを賦与したるにあらずや。若し其賦与において不十分なるも、爾は決して此以外に満足を得ること能

わざるにあらずや。」

といわれます。如来様はすでに私に本当に大事なものは与えてくださつているのだといわれるのです。そしてこの与えてくださつてい

るものをいただく、それ以外のこの世の富や健康や名声や権力などの自分に都合の良いものを手に入れても、それによつては本当の満足は得られない。ただ如来様が与えてくださるものがたとえ不十分だと思つても、それ以外のものであな

たは充足することはできないといわれるのです。
そして、
「蓋し、爾自ら不足ありと書いて苦悩せば、爾はいよいよ修養を進めて、如来の大道に安んずべきことを学ばざるべからず。」

といわれます。ですからどうも物足りないというなら、阿弥陀如来様のおはたらきをよく聴く、いわば聞法に励みなさいとまず仏法をお勧めくださるのです。
では如来様が私たちにすでに与えてくださつてい

が、これが一番の要になります。それは「如来の天命」として、表わされて、告げられ、示されているのです。

その如来の天命とは如来のおおいなる命令、いわゆる「如来の仰せ」なのです。この如来の仰せとは、私たちにアミダ仏は「汝をすでに抱いている、ここに汝とともに居る」すなわち「助ける」「引き受ける」という仰せです。これが如来の天命といわれるものです。

これはどこからいわれる仰せであるかというと、『仏説無量寿経』に説かれているアミダ如来の本願の仰せで、第十八願念仏往生の願の仰せです。すなわち「そのまなりで助ける、引き受ける」という仰せであり、如来様が「汝とともにいる」との仰せです。そのままなりで引き受けて浄土に連れて行くと言われている如来様の仰せです。

なぜそういうことが「いわれ得る」のでしょうか。それは私たちは如来様にすでに摂め取られているから

です。私たちはアミダ仏と一瞬も離れて存在していないという真実があるからです。

その証拠に、私たちの生きていく現実そのものは「一息ひと思ひ」連続のところまで生きているではありませんか。「生きている」というナマの事実は一息一息の連続であり、ひと思ひ・ひと思ひが連続しているという現実です。この現実が続いているはたらきは私の思いや計画や願望などで起こってくるではありません。

私の思いや観念や計画や計らいを超えたいのち自身のはたらきです。しかもこのいのちは「ここまで」という限界で区切られていないのです。思いを超えて心身がまずあり、それを成り立たしめている空気・大地・太陽があり、食物があり、住む家があり、地球があり、銀河があり、それと関連する大宇宙があるという、ずっとその広がり果てしないのです。これを統合的に言くと「無量のいのち」といえましよう。この無量寿

命のことをインドの言葉では「アミターユス」といいます。すなわちアミダ仏です。このアミダ仏において私は生きることができ、アミダ如来を離れて私は存在し得ないのです。

アミダ仏のお手の中にあるという原事実があつて、それよつて「今ここに」生きていく私があるのです。この事実は当たり前すぎて、普通は自分の人生において関心外に置いていきますし、忘れ去っています。しかし一番身近で大事な事実です。この現実においては、私の善悪浄穢を問われず「生かされている」という有難い現実があり、それを知らせる仏様のお言葉が「そのまなりで助ける」という第十八願の仰せであり、南無阿弥陀仏のお念仏のお声なのです。

私たちがすでにアミダ仏と離れないのであれば、もう助かっているのだから、助けてもらう必要はないのではないか、といわれることがあります。私たちが

アミダ仏に一瞬も離れないありがたい身であることを「知らない」のが私たちの現実です。日常生活は、アミダ仏など少しも考えない。自分の「ああなりたい、こうなりたい」「ああなつては困る、こうなつては困る」という欲求と不安のなかで物足りない生活を続けているのです。アミダ仏のお手の中にいても知らなければ、お手の中にいないのと同じです。

それゆえ、阿弥陀如来様の方から、如来様の摂取の中にいることを私たちに告げ知らせる仏のお言葉が南無阿弥陀仏の言葉なのです。この言葉を手がかりに、私たちはまず南無阿弥陀仏を称え、南無阿弥陀仏の意味を聞く、これが聞法生活です。

名師の野瀬芳水師の歌に

- (1) 目に見えぬ仏は声と姿かえ
 - (2) きかせ呼ばせて救う親さま
 - (3) 耳にきく口にこぼれるお六字は
- はなれず見捨てぬ親とこそ

しれ

- (4) 我となえ我きくなれど
南無阿弥陀

ここに居るぞの
弥陀の呼び声
とありますが、まさにその通りですね。

この南無阿弥陀仏を称え聞くとところにアミダ仏にであうのです。であえばおのずから人生生活が充足するのです。私のいのちの芯が充足するのです。しかるにアミダ仏を無視し、この世の栄えばかりを外に求めていると不安と空虚が心に重くのしかかってきます。それゆえ仏教ではアミダ仏に心を向けることがまず求められているのです。そうではなくてアミダ仏を無視し続け、他の人や団体や、あるいは幸運を期待し幸せになろうとして生きるとは、清沢先生が「之を人に請い之を他に求むるが如きは、卑なり、陋なり。如来の天命を侮辱するものなり。如来は侮辱を受くることなきも、爾の苦悩を奈何せん」

といわれる通りなのです。陋とは陋劣ろうれつでいやしむべきこと、という意味です。如来様を卑いやしめ、おとしめ、叛そむく、すなわち如来様を侮辱しているのだといわれるのです。それだから、私たちはいつまでたっても苦悩が止まないのだといわれるのです。

了



Kさんの問い

K「アミダ様は大いなる慈悲のお心でありおはたらきであると聞いていますが、それほどの大慈大悲の働きがはたらいっているにもかかわらず、この世に戦争が絶えず、洪水や地震が起こったり、コロナのようなウイルスが発生して多くに人がなくなったりしますが、アミダ仏はなにもなさらないのでしょうか」

A「アミダ仏の本質はいつも申しますように寿命無量

であり光明無量の用はたらきです。寿命無量は万物の用はたらきとしてあらわれますが、これには善悪はなく浄穢じやうさいもありません。いのちのはたらきに善悪浄穢はないのです。洪水や火山が爆発して人が死ぬ。これは善でも悪でもありません。やがて地球も太陽も滅びます。そうすると人類も滅ぶことになりますが、これも善でも悪でもありません。ただ人間だけがそこに善悪の価値判断をつけているのです。ゴキブリは地球が滅ぼうと自分が死のうがそこに善悪をいいません。価値判断がないからです」

K「戦争が絶えませんが、これは悪ですね」

A「ええ人間にとって戦争は悪であるといえますが、これは人間の善悪の行いによつて産み出されたものでそれによつて結果が苦しいので、私たちは悪であるか判断しているのです。だからできるだけ戦争はしないようにと願うのです。またco2の増加によつて地球が高温となり、あちこちで洪水

が起こつて多くの人が亡くなったり家を失ったりしますが、これは人間の行為が関係して自然が荒れてきたから、これは人間の悪しき行為が産み出したから改めましょうとなります。善悪は人間の行いに対していわれるのです。地震や火山の爆発で人が亡くなったといううなのは、自然の営みですから、この現象を悪とはいいいません。ただ人間にとつて都合が悪いと言うだけです」

K「善悪は人間の行いとその結果にたいして善悪をいわれるのですね。癌で死ぬと、癌は悪であるというのは、善悪の悪ではなく、都合が悪いという場合の悪ですね。」

A「ええそうです。大自然のいのちの用はたらきに善悪がないから、善人も悪人も平等にいきられるのです。ヒットラーにもいのちのはたらきがはたらいっているからヒットラーも生きられるのです。善人だから生きれる、悪人なら生きられないという

ことはないので。平等です。ただアミダ仏のいのちによつて善悪を超えて生かされている、その上で、一人一人がどう行動するかに善悪があり、その結果に善悪がいわゆるのです」

K「それではアミダ仏の大慈大悲の働きとは何ですか」

A「それはアミダ仏のいのちには光明無量の用はたらきがあります。光明の用はたらきは大悲の智慧のはたらきで、〈智慧〉は全人生の支えを「知る」はたらきです。智慧が無いから人は苦しむというのが仏教の基本です。ですからこの智慧を衆生に与えようというのがアミダ仏の大悲のはたらきです。この智慧をいただくことによつて、この娑婆の人生を安らかに善く生きることができ、ついに仏にならしてください。この智慧を万人に与えようとはたらく、これがアミダ仏の大悲の用はたらきです。ですのでアミダ仏が人の病気を治したり食料を与えたり戦争をやめさせたりするとうような、いわゆる現実の歴史の中に介入はしないのです。アミダ

仏は超能力者ではありません。この苦しく濁悪の世界を真に生ききる智慧を与え、人がこの智慧をいただいてそれに沿つて生きることが求められ、望まれているのです。ここに自由があり同時に善悪が問われる責任が人にはあるのです」

了

『住職雑感』

九月二十九日、幡谷明講話集刊行会のZOOM会議の最終回(全四十数回)を終えた。故幡谷明博士の全七巻の刊行がすべて終了したのである。編集長の日師から「編集作業を手伝ってほしい」と電話で頼まれ、軽く承諾したのであるが、実際の作業は大変だった。担当したのは第四巻で、二十二回分の先生の「浄土三経往生文類」のデータ化した講話を受け取り、それを三分の一ほどに読みやすく縮め、見出しをつけるとか、全七巻を同じルールで編集するとか、出典をできるだけ精しくするなど、すべて初めての経験で結構な動力があった。一冊が四〇〇〇円で法蔵館から安価で出版されたのは多くの有志からの寄付が一五〇〇万円もいたけたからであった。すべて終了し、肩の荷を下ろしたことであった。